



TITLE:

<Book Review>Johnson, John J.(ed.), The Role of the Military in Underdeveloped Countries, Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1962,pp.viii+423

AUTHOR(S):

矢野, 暢

CITATION:

矢野, 暢. <Book Review>Johnson, John J.(ed.), The Role of the Military in Underdeveloped Countries, Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1962,pp.viii+423. 東南アジア研究 1963, 1(2): 78-79

ISSUE DATE:

1963

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54803>

RIGHT:

ン発電工事のため、トンゲーから発電所までの間に送電線を建設しなければならない。その送電線の建設のためにトンゲーからロイコーに至る間の道路を建設する。これが、トンゲー・ロードであり、著者はそのため昭和29年の末から5年間この建設に没頭する。insurgents の出沒するカレン州の山岳地帯200kmにわたっての道路建設の consultant engineer としての体験は実にたいへんなものだ。この経験が淡々として、語られている。文章はよく、しかも多数の地図や写真がいっそう読みやすくさせている。まことに興味ある読みものである。

東南アジアにおける土木技術者の仕事がいかにたいへんであるかは、本書でよくうかがえるであろう。それとともに、それがなぜたいへんなのか、その言外の意味がいろいろと考えさせられる。とくに、developing countries における経済計画のありかた、またそこにおける指導者や住民の behavior にいろいろと問題があろう。これだけ苦労して建設したバルーチャン発電所の第1期工事8.4万kwがビルマ経済発展にはたす役割こそ、とくに知りたいと思う。おそらく、わたくしだけでなく、本書を読みおわったあと誰しもが希望するのではなからうか。とりわけビルマが“The Burmese Way to Socialism”を進んでいる今日、いっそうこの建設工事の現実的成果が知りたいものである。(本岡武)

Enke, Stephen: Economics for Development. Prentice-Hall, Inc., Engelwood Cliffs, N.J. 1963. pp. xxii+611.

東南アジアの経済開発問題を取りあつかうためには、経済開発理論をかためておかねばならない。

経済開発理論の文献としては戦後20年近くの間に、数多くの出版を見るに至り、経済学において、ひとつの分野を確立するに至っている。

しかし、新刊のデューク大学教授エンケによる本書は、とくに注目をひく。第1にそれは近代経済学の成果を、グラフ、モデルおよびタームをとおして、きわめてわかりやすく、経済開発理論にとりいれている。しかも本書が All the Peasant Cultivators of Asia, Africa, and the Americas, Who Remain the Forgotten Men and Women of Economic Development にデディケートされているように、著者の

多年にわたる現地研究と、そのときに体験した低開発国の農民にたいする愛情とでつらぬかれている。まさしく理論と実践とのたくまざる組み合わせが、ここに見られる。しかも第2に、経済開発にかんする主要問題をもれなくカバーしている。すなわち、第1編の低開発の特徴からはじまり、第2編に開発のための innovation の意味、その innovation を実現するために、第3編では資本の蓄積と投下、第4編では労働の投下、さらに第5編は開発と貿易および援助との関係、最後に第6編として展望をとりあつかう。末尾の文献もよくできている。わたくしは、本書は経済開発にかんする入門書あるいは概説書として非常によくできていると思う。とりわけ、農業問題を強くとりあげていることは、低開発国の現状からして当然であろうが、興味深く思われる。そのなかで、低開発国における経済開発の方向として一挙に工業化を促進するか、それとも農業から固めてゆくかとの問題はエンケ教授の深い関心の問題である。これについては付録Aとして、Review of Economics and Statistics の1962年2月で発表した論文に手を加えた「農業生産性向上をとおしての工業化」が再掲載されている。おそらく、経済開発を具体的に考える場合の根本的問題のひとつであろう。その農業生産性向上についても、農業革新は community development なくしてあり得ないとの主張もまことに同感である。

もっとも、本書は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ等の全世界の低開発国を取りあつかっているために、東南アジアの実情にマッチしない議論も多い。また東南アジアといっても国々によって経済開発の現実やこれからのありかたはまちまちである。この多様性を考えながら本書を読むとき、いかに経済開発が現実の問題として困難であるかを思わせる。いずれにせよ、わたくしは本書は経済開発にかんしてぜひとも一読おすすしたい好著であると思う。(本岡武)

Johnson, John J. (ed.): The Role of the Military in Underdeveloped Countries. Princeton University Press, Princeton, New Jersey. 1962. pp. viii+423

比較政治学の分野で、新興諸国と軍部との必然的結びつきが語られるようになってから久しい。しかし、従来はその主題に関するケース・ワークがなされず、も

っぱら純理論的考察のみがなされる傾向が顕著であった。その点新興諸国の軍部の実態を探るケース・スタディの堆積の端緒を切るべき一書が、このたび、The RAND Corporation の努力で公けにされたことは、なにはともあれ実に有意義なことであったと思う。

12篇からなる論文集である本書は、新興地域全般を扱っているが、そのうち3篇が東南アジアに関係している。とりあえず、その3篇それぞれの個性を捉えておこう。内容はいずれも立派で甲乙はつけ難い。

まず、G. Pauker がインドネシア軍部を担当して、インドネシア政界で重きをなす軍部をば、多面的な視角から解剖している。46頁にわたる叙述の、最後の10頁余りが、実に面白い。現在の軍部が内に多大な問題性を孕んでいること、その理由などが、明快に描かれているからだ。またその個所は、神秘の人ナスチオンの心中の思惑を測定してもおり、同時に、共産党の軍部観にまで筆は及んでいて、インドネシア政治の将来の展望に益するところが多い。Pauker の本稿執筆の真の趣旨を探るのも一興だろう。というのは、かれは、主体性を欠き没意慾的なインドネシア軍部を素材として、軍部をば新興国家の守護神と見做す通説に、痛烈な逆説をぶっつけている感じだからだ。

次いで、L. Pye がビルマ軍部論を展開している。かれは、民族主義政治家と植民政府以来の行政官との相剋が、機動的な政治権力の確立を妨げ、そのことがひいては軍部擡頭の土台になった、という、かれの従来からの持論を展開している。その限りでは、かれの説得力は大したものだ。しかし、軍部それ自体の社会的性格等の分析が欠けているため、将来の展望を行う段になると、議論がにわかに甘くなる。

最後に、タイの軍部を、D. Wilson が論じている。一次資料が駆使され、いかにもかれらしい構想に応じて書かれている。タイの軍部史は、研究の余地をまだ多分に残しているわけだが、本稿でも、歴史的叙述の個所より、現在の軍部を、その内部構造・政治理念・政治的行動様式等を捉えることによって、内面的に理解しようとする試みのなされている個所のほうが、ずっと冴えている。Wilson は、結論として、タイの軍部が、政治的正当性の裏打ちを欠くことを、かなり明確に示し出している。しかし、かりにそうだとすると、その正当性喪失の責任の所在をどこに追跡し、求めたらいいかのか、また、軍部以外に正当性を備えた有力な

政治勢力が一体全体存在しているのか、Wilson は、本稿では、まったく答えてくれない。

以上の3篇は、このようにいずれも独自の個性をもっているが、みな一読の価値は充分ある。それらを収めた本書は、類書が皆無であるだけに、是非とも、この地域の政治に関心をもつものの座右に備えられてしかるべきであろう。

なお本書の冒頭に、E. Shils それに L. Pye が、新興地域の軍部について、一般理論的見解を展開しているが、とりわけ Pye のは有益である。Shils のも、かれの最新の近代化理論として、見逃せない (Shils は、本書で、新しく military modernizing oligarchy という概念を提案している)。(矢野暢)

**Butwell, Richard: Southeast Asia, Today-
And Tomorrow, A Political Analysis.
Frederick A. Praeger, New York. 1961. pp.
x + 182**

本書は、ビルマの専門家 Butwell が、東南アジア全体の政治を、かれなりに整理し、脈略づけた、東南アジア政治概説書である。一見平易で、入門書体的裁を呈しているが、出門の書ともいえるだけの味のある本である。最近刊行されたこの種の本に、Victor Purcell: The Revolution in Southeast Asia, 1962 があるが、東南アジアの現代政治の動態を内在論的に多角的に生き生き捉えている点では、Purcell のものより本書のほうが高く買える (Purcell の知識は、該博かつ正確だが、どちらかといえば歴史的な叙述にかたより、現代政治にたいする問題意識に立体的な深みがなく、また冷た過ぎるきらいがある)。

本書の構成を見ると、第一章、アジア的基盤と西欧の感化、第二章、最初の政府選択、第三章、肌に合った政治制度の探索、この三章で、東南アジア諸国が過去辿ってきた試行錯誤の道程と将来辿る可能性のある道筋が、明快に描かれている。現在に至るまでの複雑な歴史的経緯が、各国別に、まったく要領よく、整理されている。第四章、政治過程、は短いわりに充実している。この地域の政治の動向を左右する要因の所在を知る上で、大いに参考になる。第五章、政府の施政、第六章、宿弊と政策変更、では、諸国の社会体制近代化の態様と、近代化を妨げる要因とが、多面的に追求されており、興味深い。第七章、共産主義の挑戦、